〔藤原基俊家集下〕さがにまかりて、鹿のなくを聞てよめる、

をしか鳴この山里のさがなればかなしかりけり秋の夕ぐれ

〔塵袋四〕一シヽヲ鹿ト云歟

常ニハカノシヽニ限リテシヽト計云歟、但日本紀ニハ、鳥獸ト書テ、トリシヽト讀マセタリ、諸獸ニワタル詞歟、猪鹿ニ限リテ云フメリ、

〔古事記傳二十七〕白鹿は、斯漏伎加と訓べし、和名抄に鹿、和名加とあり、鹿は加と云ぞ正しき名なる故、萬葉の歌を考るに、鹿一字を書る處は、何れも加と訓て宜きを、今本にみなシカと訓るは非なり、シカと訓ては、皆句の調わろし、心を著べし、志加と云處には牡鹿と書たり、されば志加と云は、牡鹿に限れる名と聞えたり、シカと訓べき處に、たゞ鹿と書るは、集中にいくばくもあらず、さて和名抄に、牡鹿、佐乎之加、牝鹿、米加、麑加吳とあり、又かのしゝと云も、猪をゐのしゝと云と同じくて、加と云名なればなり、其外地名或は借字などにも、凡て鹿字は加と云に用ひたり、是其正しき名なるが故なり、然るにかせぎと云を、古名と心得て、書紀などにても然訓るは、中々にひがことなり、凡て尋常に異りて耳なれざる言を以て、古言と心得るはひがことなり、鹿をかせぎと言ことも、正しくは見えたることなれし、其はたゞ春日ニ祭ル神の内なる、鹿島神の、東國より大和に來坐し事を傳へたるに、かせぎに乘てと云るのみなれば、是もかの父母をかぞいろはと云なれば、是も同じ類と知べし、

〔松の落葉三〕さをしか。

故鈴の屋大人のいはれしは、萬葉集なる、鹿の字は、みな加とよむべし、しかとよみては、いづれも文字あまりて、しらべわろし、しかにはかならず、牡鹿と牡の字をそへてかけり、心をつくべし、鹿の字をしかとよみてよろしきは、わづかにひとつふたつなりといはれき、此考によりて、ある人さをしかの事を、しかは牡鹿のことさはそへていへる詞にて、をは小のこゝろならんといへり、かの萬葉集に、左小牡鹿ともかきたれば、げにさることのやうなれど、よくおもひめぐらすに、さにはあらじ、さと小とかさねていへる例も見えず、さはそへていふ詞、をは男にて、しかは鹿なるべし、和名抄に鹿和名加とあれども、昔よりしかともいひつらんとおもはるゝは、同書に麋於保之加新撰字鏡に、麋久自加、又於保自加、とあるは、皆大鹿のこゝろにて、大牡鹿の心にはあらず、又萬葉集八の卷、三十